

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：34533

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593419

研究課題名(和文) 父親・母親に対する産後うつ病予防統合プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the postpartum depression preventive unification program for parents

研究代表者

西村 明子 (NISHIMURA, Akiko)

兵庫医療大学・看護学部・教授

研究者番号：20324783

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、我が国における、産後4か月の父親のうつ病の有病率と関連要因を明らかにし、産後うつ病の予防と早期発見のための産後健診プログラムを開発することを目的に研究を実施した。2032組の生後4か月の乳児の親に調査を行い、807組の親を分析対象とした。110名(13.6%)の父親がうつ状態であり、パートナーのうつ状態と低い夫婦関係満足度に関連があった。産後4か月から6か月の夫婦6組にインタビューを行い、母親は父親に比べて生活の変化が大きいと感じており、夫婦関係は、父親の家事や育児の量ではなく、パートナーや子どもへの父親の関心の程度が影響する可能性があることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The aims of this study were to examine the prevalence and relevant factors associated with paternal postnatal depression at four months postpartum. We distributed 2032 self-report questionnaires to couples (one mother and one father) with a 4-month old infant. Data from 807 couples (39.7%) were analyzed. One hundred and ten fathers (13.6%) were depressed. According to the logistic regression analysis, paternal depression was positively associated with partner's depression and negatively with marital relationship satisfaction. We interviewed six couples with 4-6-month-old infant. As a result, mother felt that a change of the life was bigger than father. As for the couple relations, it was revealed that degree of the interest of father in partner and child might influence it not quantity of housework and the child care of father.

研究分野：母性看護学

キーワード：産後うつ病 父親 夫婦関係

1. 研究開始当初の背景

産後うつ病の父親の子どもは、多動や喧嘩が多いなどの発達上の問題があることが、英国、米国、豪州における1万人から2万人規模の大規模調査で報告された (Ramchandani et al., 2005; Weitzman et al., 2011; Fletcher et al., 2011)。また、父親のうつ状態は子育てとも関連しており、うつ状態の父親はそうでない父親に比べて、読み聞かせや歌を歌うなどの子どもとの豊かな関わりが有意に少なく (Paulson et al., 2006)、1歳未満の乳児を叱る際に体を叩くことが4倍多いと報告された (Davis et al., 2011)。

妊娠初期から産後1年までの父親のうつ病の有病率は10.4%であり、最も低い時期が出産から産後3か月までの7.7%、最も高い時期が産後3か月から6か月の25.6%である (Paulson et al., 2010)。我が国における父親の産後うつ病に関する研究がほとんどない中、我々は2007年から父親の産後うつ病についての研究を積み重ねてきた。その結果、産後1か月の父親のうつ病の有病率は14.3% (Nishimura et al., 2010)であり、我が国においても1割を超える父親が産後にうつ状態に陥っていることが判明した。また、産後1か月の父親のうつ状態の関連要因は、精神的問題での医療機関受診歴や不安定な就労状態など、父親自身の属性であった。

次に父親の産後うつ状態の推移を明らかにすることを目的に、妊娠末期から産後1年にかけての縦断調査を実施した。その結果、約1割の父親が妊娠期からうつ状態であり、産後もうつ状態が持続する者、産後新たにうつ状態となる者がみられた。また、約2割の母親が妊娠期にうつ状態であり、産後1か月には約半数の母親がうつ状態に陥っていた。産後のうつ状態が子どもに及ぼす影響を考えると、父親と母親の両方を対象としたうつ状態の防止対策が急務であ

る。

これまで父親は母親をサポートする存在として捉えられてきたが、父親も産後にうつ状態に陥ることが明らかになっている今、産後のサポートは両親を対象とするべきである。現在、多くの父親が妻と一緒に出産準備教室に参加し、産後の健診に同伴している。また、わが国の乳幼児健診は、その高い受診率を背景に、疾病や異常の早期発見の機会であることに加えて、育児支援の場としての意義が強調されることが多くなってきた (衛藤、2010)。

そこで、我々は、この育児支援の機会を父親にも拡大し、父親の精神的健康状態を把握するとともに、産後うつ病を予防するための「父親の産後健診プログラム」の開発が可能な状況にあると考えた。このプログラムが機能することにより、虐待やドメスティックバイオレンスなどの母子間、夫婦間の問題についても情報を得る機会が増加し、今後の調査・研究の発展に寄与すると考える。

2. 研究の目的

本研究は、父親の産後うつ病の早期発見と予防を目的に、産後の健診プログラムを開発・実施し、プログラムの妥当性とその効果を検証することを目的としている。

3. 研究の方法

研究1：父親の産後うつ病を予防するために必要な支援を明らかにすることを目的に、父親のうつ状態の有病率が最も高いと報告されている産後3か月から6か月の父親の産後うつ状態の有病率と関連要因を大規模サンプルにおける調査により明らかにした。

研究2：父親の産後うつ状態の関連要因についての具体的な状況を把握することを目的に、産後4か月から6か月の父親と母親にインタビューを実施した (現在、継続中)。

研究1

(1) 研究対象者

2013年1月から4月の期間に神戸市の4つの区に在住する生後4か月の子どもを養育している2032組の夫婦

(2) 研究依頼方法

父親と母親に対する研究協力の依頼文書と調査票を生後4か月健診の案内に同封して配布した。本研究への協力を依頼する文書には、研究の目的と方法、プライバシーの保護、研究の不参加による不利益はないこと、研究辞退の自由を記載した。各調査票は個人が特定されないように任意の番号を付した。調査票は母親と父親で相談せずに個々に記入し、自宅で封をして4か月健診会場の回収箱に母親または父親が投函した。研究代表者は調査票を回収し、兵庫医療大学内の安全な場所に保管した。我々は、調査票の投函をもって研究の同意を得たものとみなしたため、個々の対象者から文書による同意書は得ていない。

対象者が調査中または調査後に精神的なストレスを感じた際には、研究代表者（西村）に直接メールか電話でコンタクトをとれること、精神状態について産婦人科医（研究分担者：大橋）を受診し相談できることを説明した。

(3) 調査内容

アウトカム変数

産後のうつ状態をアウトカム変数とした。エジンバラ産後うつ病自己調査票(EPDS)は、母親の産後うつ病のスクリーニングスケールとしてCoxらが開発した。EPDSは10の短い文章で構成されており、8つがうつ症状（悲しみ、自責感）、2つが不安症状（心配や不安、恐怖やパニック）を問うものである。父親と母親は過去1週間の状態について、それぞれの問いに対して4つの選択肢のうち最も近いものに回答する。10項目の合計得点を計算してうつ

状態を評価する。EPDSの信頼性と妥当性は世界中の研究で適切であると証明されている。日本語版における信頼性と妥当性は岡野らが検証しており、カットオフ値は9点以上であることが感度75%、特異度93%で示されている。EPDSの信頼性と妥当性は男性への使用においても検証されており、我々は日本人男性のカットオフ値を分析し、感度81.8%、特異度94.1%で8点以上をうつ状態とした。

本研究における父親のEPDSのCronbachのalpha係数は0.81であった。

説明変数

属性：年齢、教育レベル、雇用状態

健康状態：現病歴、薬剤の使用（抗うつ薬、抗不安薬、気分安定薬、睡眠薬）

心理的要因：精神的な問題での医療機関受診歴、過去1年間のライフイベント、経済的な不安

妊娠出産、子どもについての情報：妊娠の時期、妊娠を望んでいたかどうか、不妊治療、初子かどうか、単胎か多胎か、分娩週数、子どもの健康状態、パートナーとの同居の有無

夫婦関係満足度：Norton (1983)のthe Quality of Marriage Index (QMI)。夫婦関係の満足度を測定する1次元尺度である。この尺度は、6項目からなり、次の選択肢で回答する：かなりあてはまる(4点)、どちらかといえばあてはまる(3点)、どちらかといえばあてはまらない(2点)、ほとんどあてはまらない(1点)。合計得点は関係性の満足度を示す。最も高い得点は24点で、最も低い得点が6点である。得点が高いほど、高い満足度を示す。諸井は、保育所または幼稚園に通う子どもの母親を対象にQMIの日本語版を検証し、その信頼性を報告している(Good-Poor Analysis: $p < 0.001$, I-T correlation: $r = 0.721-0.835$, first factor loading, $0.802-0.892$), and internal consistency (Cronbach's alpha, 0.927)。

本研究での 父親におけるCronbachのalpha係数は0.88であった。

(4) データ分析

父親はEPDS8点以上、母親は9点以上をうつ状態群として分類した。父親の属性をうつ状態の有無によりt検定とFisherの直接確立法で分析した。父親のうつ状態の関連要因を明らかにするために、うつ状態を従属変数、年齢、雇用形態、精神的な問題での医療機関受診歴、経済的な不安、望まない妊娠、不妊治療、初めての子ども、パートナーのうつ状態、夫婦関係の満足度を説明変数としてロジスティック回帰分析を行った。統計学的分析にはSPSS version 22を使用し、有意水準を5%とした。

研究2

(1) 研究対象者

産後4か月～6か月の初めて親になった夫婦5～10組。除外基準を以下に示す。

- 日本語を話すことができない
- 精神疾患に罹患している
- パートナーと同居していない(婚姻関係は問わない)
- 出生した子どもの数が2人(多胎)以上
- 児の健康状態に問題がある(定期的に小児科受診が必要)

(2) 研究依頼方法

A診療所の産後クラス(産後4か月から6か月)に来院した親に調査内容と倫理的配慮を記載した文書を用いて口頭により依頼を行った。母親または父親のみが来院している場合、来院している親にパートナーへの説明を依頼した。

(3) 調査内容

質問紙調査
うつ状態の測定 (EPDS)、年齢、家事・育児時間、労働時間、心の問題での医療機関での相談歴

インタビュー(半構成的面接)

初めての赤ちゃんとの生活はどんな経験だったか、また、医師や助産師から教えておいてほしかったことや、あれば良いと思うサポートについてインタビューを実施した。

(4) データ分析

録音内容から逐語録を作成し、内容分析を実施した。

4. 研究成果

研究1

研究1の目的は、日本人の父親の産後うつ状態の有病率と関連要因を大規模サンプルにおいて明らかにすることである。2032名の夫婦に調査票を配布し、すべての項目に回答した807組(39.7%)の夫婦を分析対象とした。807名の父親のうち、EPDSが8点以上の者は110名(13.6%)であった。また、父親のうつ状態に有意に関連していた要因は、パートナーがうつ状態であること(adjusted odds ratio (AOR) 1.91; 95% confidence interval (CI) 1.05-3.47)、夫婦関係満足度が低いこと(AOR 0.83; 95% CI 0.77-0.89)、不妊治療による妊娠であったこと(AOR 2.37; 95% CI 1.32- 4.24)、精神的な問題で医療機関を受診した経験があること(AOR 4.56; 95% CI 2.06-10.08)、経済的な不安があること(AOR 2.15; 95% CI 1.34-3.45)であった。

対象者の属性として、教育レベルは日本人全般のレベルと同様であり、父親の年齢と初子の割合も我が国全般の状況と同様であった。ほとんどの対象者が正期産での出産であった。しかし、パートタイムと無職の父親は日本人全体の割合からすると少なかった。うつ状態の父親とうつ状態でない父親との間に、これらの項目について有意な差や関連は認められなかった。

本研究で得た13.6%という有病率は、

Paulson らの報告(産後3~6か月の有病率25.6%)に比べて低い結果であったが、1割の父親がうつ状態であり、対策が必要であると考え。

父親のうつ状態は母親のうつ状態および夫婦関係の満足度が低いことと有意に関連していた。我々の先行研究では、産後1か月において父親のうつ状態は母親のうつ状態と関連が認められなかった。日本人の母親の多くが伝統的に出産前から産後1か月まで実家で過ごすため、家庭と社会生活の変化を父親が経験していないことがその理由であると考え。しかし、産後4か月時点では、それらの変化を経験し、その変化に夫婦がうまく適応できないために夫婦関係が悪化し、うつ状態に陥っているのではないかと考える。また、不妊治療による妊娠が父親のうつ状態に関連していた(AOR 2.37)。本研究では、103組(12.8%)の夫婦が不妊治療により妊娠しており、これは国際的な推計である9.0%よりも多い。不妊治療は夫婦に不安やうつ状態を引き起こし、その影響は男女で異なる。このことは、不妊治療がパートナー間の関係性に影響していることを示唆している。

父親の産後うつ状態の最も強い予測因子は精神的な問題での医療機関受診歴であった(AOR 4.56)。これは、精神疾患の既往歴に関係なく精神健康問題への脆弱性が産後うつ状態を増加させることを示唆している。我々の産後1か月に行った先行研究でも同様の関連が認められている。したがって、医療従事者は、精神的な問題で医療機関を受診した経験を有する父親を妊娠前から把握し、できる限り速やかにサポートが得られるように配慮することが重要である。

経済的な不安が父親のうつ状態と関連していたが(AOR 2.15)、雇用形態とは関連が認められなかった。Gailloらは、柔軟な労働時間、育児休暇、作業における自律など

の労働環境が父親のうつ状態と持続的に関連していることを報告している。本研究において、46名(5.7%)の父親が非正規雇用か無職であったが、この割合は2012年の日本人男性の非正規雇用率(19.8%)と比べて少ない。非正規雇用か無職の父親のうち、6名の父親だけがうつ状態であり、この数字はロジスティック回帰分析を行うには不十分である。我々の産後1か月の日本人男性における先行研究では、雇用形態は父親の産後うつ状態と強い関連を示した。日本において、父親の産後のうつ状態と労働環境との関連を確定するために、非正規雇用または無職の父親の数を増やして分析する必要がある。

研究2

現在、調査を継続中であるが、これまでに6組の夫婦にインタビューを実施した。その結果、母親は父親に比べて生活の変化が大きいと感じていた。夫婦関係自体は妊娠前から変化せず、その良否は父親の家事や育児の量ではなく、父親の子どもやパートナーに対する関心の程度が影響している可能性がある。

結論

約1割の父親が産後4か月にうつ状態であり、その関連要因はパートナーのうつ状態と夫婦関係の不満足であった。また、産後の夫婦関係の良否は父親のパートナーや子どもに対する関心の程度が影響している可能性があることがわかった。

以上のことから、父親の産後のうつ状態を予防するためには、産後の母親と子どもについての父親の理解を深め、また、関心を高めるような支援が必要であると考え。現在、調査を継続中であるが、これらの結果を基に、父親の産後うつ病の啓発と予防のための冊子を作成中であり、それをを用いた教育を実施して効果を検証する予定である。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Akiko Nishimura, Yuichi Fujita, Mayumi Katsuta, Aya Ishihara, Kazutomo Ohashi.
Paternal postnatal depression in Japan: an investigation of correlated factors including relationship with a partner. BMC Pregnancy and Childbirth (2015) 15:128, 1-8.
DOI: 10.1186/s12884-015-0552-x

藤田優一、西村明子、勝田真由美、石原あや、大橋一友、産後4か月の乳児をもつ父親の夫婦関係満足度への影響要因、日本看護学会論文集 母性看護44、(査読有)、平成26年(2014年)、34-37頁

〔学会発表〕(計3件)

西村明子、藤田優一、石原あや、勝田真由美、大橋一友、産後4か月の母親と父親のうつ状態の関連、第33回日本看護科学学会学術集会、平成25年12月6日、大阪国際会議場(大阪府大阪市)

Akiko Nishimura, Yuichi Fujita, Aya Ishihara, Mayumi Katsuta, Kazutomo Ohashi.
Risk factors of Japanese mother's depression at four month after delivery. 3rd World Academy of Nursing Science, 平成25年10月17日, Seoul(Korea)

藤田優一、西村明子、勝田真由美、石原あや、末原紀美代、大橋一友、産後4か月の乳児をもつ父親の夫婦関係満足度に関連する要因、第44回日本看護学会-母性看護-学術集会、平成25年9月26日、岡山コンベンションセンター(岡山県岡山市)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

西村 明子 (NISHIMURA, Akiko)
兵庫医療大学・看護学部・教授
研究者番号：20324783

(2)研究分担者

大橋 一友 (OHASHI, Kazutomo)
大阪大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号：30203897

石原 あや (ISHIHARA, Aya)
兵庫医療大学・看護学部・准教授
研究者番号：20290364

藤田 優一 (FUJITA, Yuichi)
武庫川女子大学・看護学部・講師
研究者番号：20511075

勝田 真由美 (KATSUTA, Mayumi)
日本赤十字広島看護大学・看護学部・講師
研究者番号：70514909
(平成24年度まで研究分担者)

末原 紀美代 (SUEHARA, Kimiyo)
徳島文理大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：90112044
(平成24年度まで研究分担者)